

令和6年度 福井県立奥越特別支援学校 学校評価書

【担当部】 具体的取組	項目	成果と課題	改善策・向上策
<p>【図書研究部】</p> <p>主体的な学びに沿った目標設定と支援、学びの多様な評価により、幼児児童生徒が自ら考え、気付き、表出する学びを支える授業づくりや仕組みづくりに取り組む。</p>	<p>教育課程・学習支援</p>	<p>今年度の校内研究では、「主体的な学びを保障する学校づくり」というテーマの中でも「集団活動」に焦点を当て発展させることにした。年度末の教職員アンケートによると、主体的な学びを踏まえた授業づくりができたという回答した教員（「7割以上」と「5割以上」を合わせた回答数）の割合が、昨年度の94.2%から96.1%になり、高い割合で主体的な学びを意識した教育活動ができていると考えられる。今年度の研究グループ編成は昨年度の縦割りから各学部での編成に変更されたことで、具体的な授業実践に基づいた研究が進められたという肯定的な意見が多く見られたが、その一方で、全体としてのまとまりに欠けるという意見もあった。子どもや保護者のアンケートでは、授業への満足度が高い回答が昨年度の98.3%から90.9%と、依然として高水準ではありつつも満足できていないという回答が微増している。これらの点を踏まえ、より一層の連携と統一性を図り、より多くの子どもが主体的に参加できる質の高い授業を目指して、研究をさらに進めていく必要がある。</p>	<p>来年度は特教研での幼・小学部の実践発表を控えており、より全体のまとまりを意識した校内研究が求められる。研究グループの編成については、今年度同様、学部ごとの編成を基本とする一方で、全体研修などで今年度も採り入れた縦割りグループの併用や、授業づくりのスキル向上を目指した研修など、研究の全体の情報共有と協働を促進する方策を考えていきたい。また、授業内容の充実に関しては、子どもや保護者からのフィードバックを活かしながら、集団活動と個別のニーズのバランスを取った授業づくりや、子どもの興味や関心に応じた授業内容の工夫をさらに追求していくことで、より良い学びの環境を提供し、子どもたちの主体的な学びをより深く支援していくことが求められる。</p>
<p>【幼小学部】</p> <p>主体的な学びに沿った目標設定と支援、学びの多様な評価により、幼児児童生徒が自ら考え、気付き、表出する学びを支える授業づくりや仕組みづくりに取り組む。</p>		<p>今年度は、一人一人の多様な学びを大切に実践を行った。学部全体で行う授業を複数設定し、そのうちの遊びの指導（合同遊び）と生活単元学習（誕生会）を研究対象授業として、学部の日で検討を重ねた。学部の日では、幼児・児童一人一人の行動の意味付けをし、そこに含まれる思いを考えていくことで、一人一人の多様な学びに気付くことができた。また、活動に入れない幼児・児童に関しては、思いに寄り添いつつ、幼児・児童と活動をつなぐ支援（仕掛け）について、題材や環境、支援の工夫を教員同士で考えながら実践を進めた。実践の中で幼児・児童の姿に変化が見られ、自ら考えて、気付き、行動するなど新たな学びの姿が見られるようになってきている。</p> <p>宿泊学習や校外学習など、校外での活動を多く実施でき、一人一人が経験を広げることができた。来年度以降も引き続き、児童の体験活動の充実を図っていきたい。しかし、医療的ケアを必要とする児童の校外活動や宿泊を伴う活動については課題が残っている。今後、安全に実施するにはどうしたらよいかを保護者や主治医と相談しながら考えていかなければいけない。</p> <p>交流および共同学習においては、居住地校交流を希望する全ての児童が、相手校に行き直接交流を行うことができた。交流では、相手校の児童とやりとりをしたり、共に活動をしたりすることができ、同年代の友達と関わる経験を広げることができた。</p>	<p>今後も、一人一人の多様な学びを大切に授業作りに取り組んでいきたい。そして、集団での授業を通して、自分の思いをそれぞれの方法で表出しながら、児童同士が関わり合う経験を積むことで、友達と一緒に学び合うよさに気付いていけるような授業作りを学部の教員全員で目指す。授業後には、丁寧に児童の様子について振り返りし、支援の方法や環境設定などを見直ししながら、次の授業に活かしていけるようにしていきたい。また、今年度成果が見られた、学部集団での活動を引き続き行い、変化を見とっていきたい。</p>
<p>【中学部】</p> <p>主体的な学びに沿った目標設定と支援、学びの多様な評価により、幼児児童生徒が自ら考え、気付き、表出する学びを支える授業づくりや仕組みづくりに取り組む。</p>		<p>中学部では生徒の主体的な学びに沿った授業づくりを進めた。多様な生徒が参加する集団における授業におけるチームティーチングの在り方について検討した。授業共有シートを活用し、個々の生徒の目標や必要な支援を明確化する取り組みがなされた。また、個々の生徒が抱える困り感について複数の教員でその背景や必要な支援を考えた。生徒が分かって授業に参加するための視覚支援や自分の意思を表出するためのツールの充実を図ったり、得意なことや興味関心がある題材を取り上げたりするなどの工夫をすることができた。その結果、個々の生徒が生き生きと主体的に取り組む姿が見られた。</p> <p>今年度は、奥越青少年自然の家における自然体験学習や社会見学等を目的とした校外学習を実施した。居住地校交流、学校間交流も例年通り実施することができた。また、地域販売会の他、高齢者施設の方との交流、豆腐づくり体験、寄せ植え体験など、地域の方々との交流を通して学ぶ機会も多く設定することができた。個に応じて参加の仕方を選択できるような工夫も行われた。学校外に出て体験的に学んだり、地域の方と交流したりすることは、生徒たちにとって大きな喜びであり、生徒たちは意欲的に学習に参加し、主体的な学びにつながったと考えられる。</p>	<p>今後も、授業共有シートを活用しながら、個々の生徒に合った目標設定をしたり、個別の支援の充実を図ったりした授業づくりを進めていく。</p> <p>授業共有シートを作成していくことで、各教科が育成を目指す資質能力を明確にししながら、各教科の目標内容に照らした観点別学習の評価を進めていくことも目指したい。そのような授業づくりを進めていくことで、生徒の主体的な学びを一層深めることができると考える。</p> <p>また、来年度も地域の方との交流や校外の地域資源を活用した学習活動を積極的に行っていく。</p>
<p>【高等部】</p> <p>主体的な学びに沿った目標設定と支援、学びの多様な評価により、幼児児童生徒が自ら考え、気付き、表出する学びを支える授業づくりや仕組みづくりに取り組む。</p>		<p>高等部では、各教科や領域の授業、その他の学習活動の中で、集団活動を含めた学びの実践を追究してきた。高等部の生徒と教職員が「個々が生きる集団」となっていくために、各学年ごとに対象生徒を挙げて、個別最適な学びと協働的な学びという視点から実践を行い、省察を通して実践を深めていった。その際、生徒のニーズを把握しよりよい支援につなぐためには、診断的な理解にとどまることなく、具体的なかかわりや活動の場面を通して、複数の教職員による複合的な視点から、共感的で形成的な理解を深めていくことの重要性を再認識することができた。これらの実践を通して、高等部全体として、生徒の主体的な学びに向かう授業づくりや仕組みづくり（カリキュラムを含む）を様々な活動や場面に広げ、展開していくことができた。</p> <p>特に、生徒会執行部を中心として、学校全体に対する挨拶運動や集会等の運営により、上級生としてよりよい学校を目指そうという取組が行われた。また、総合的な学習と関連付けて、新制服・新体操服選挙などを実施して、学校に役立つ活動を展開してきた。また、作業学習や家庭科の学習等において、幼小学部や中学部の幼児児童生徒と交流する機会をもつことを通して、下級生が上級生とのかかわりから新しい学びを得たり、上級生が下級生とのかかわりから癒やしを得て思いやりの心を育んだりするなど、多様な個性と出会いながら相互育ちが生まれている。今後も、幼稚部から高等部までである本校の特徴を生かし、高等部段階での生活年齢に相応した学校生活への働き掛けや取組を通して、生徒の主体性、主権者意識、社会貢献性を育てていきたい。</p> <p>一方で、高等部段階における心身の発達課題への支援という視点から見ると、昨年度に引き続き、自立活動における主体的な学びへの支援が重要な取組になった。不登校傾向の生徒については、学校で学ぶことができるまでの柔軟で段階的な支援を行いながら、他方では学校外施設を利用した学びの保障にも取り組んできた。生徒自身の学びの意味やキャリアの問題を捉えながら、学校と学校以外の学びの場や居場所、相談先（相談相手）とつながることで、自立や社会参加につながる契機とした。</p> <p>また、社会への移行期に差し掛かった生徒については、専門機関・相談機関と連携し、支援会議等を通して、卒業後の生活を見据えた課題を共有して、適切な支援につながるようケースワークに取り組んだ。</p>	<p>今年度のように、研究と研修と実践が一体となった取組を行っていく。教職員が実践上の課題を共有し合い、複数の目で複合的な視点から生徒のニーズと支援策を捉え、省察的な実践を通して、生徒の主体的な学びを保障する実践的力量的の底上げを図っていきたい。さらに、主体的な学びに向かう授業づくりをしていくためにも、それを支える仕組みづくり（カリキュラム・マネジメント）にも積極的に取り組んでいきたい。</p> <p>また、昨年度に引き続き、高等部段階における心身の発達課題に対応していくために、各教職員がコーディネーター的な資質を高め、他の専門機関と連携したケースワークに積極的に取り組んでいく必要がある。生徒やその保護者を取り巻く多様な支え手と連携しながら、生活基盤や心理的な安定を図り、そこから自立や社会参加を促す支援を図っていきたい。</p>

【担当部】 具体的取組	項目	成果と課題	改善策・向上策
<p>【教務部】</p> <p>地域の人的・物的資源を活用するための新しいかたちを取り入れながら、教育実践を行う。</p>	<p>教育課程・学習支援</p>	<p>今年度は、感染症対策を緩和しつつ、コロナ禍前の教育活動に少しずつ戻す動きとなり、公共交通機関を使ったクラス・学年の校外学習のほか、地域との交流活動や地域の人的・物的資源を活用した活動などが増えてきた。</p> <p>学校全体としては、おくえつ学校祭において昼食をはさんだ午後の活動(PTA販売や福祉事業所による販売、PTAによるビンゴ大会など)が復活し、また、地域の方をお客として招いての「地域販売会」を、小・中・高挙げて参加・開催することができた。</p> <p>幼・小学部では、長野県で活動しているアーティストを招いてサーカスアウトリーチ(ジャグリングやエアリアル体験)を実施した。小学部高学年では、「左義長祭り保存会」の方を招いてばちさばきや太鼓の叩き方の指導をしていただき、地域の伝統芸能の魅力を直接子どもたちに伝えていただいた。居住地校交流、成器南小学校との学校間交流(直接交流)のほか、遠隔機器を利用した嶺南東特別支援学校との交流(間接交流)も行っている。</p> <p>中学部では、奥越青少年自然の家での自然体験学習(野外炊さん)や、自然保護センターでの野鳥レストランの見学を実施した。外部専門家による技術指導として、講師を招いての寄せ植え・フラワーアレンジ体験やゆめおーれ勝山でのベンガラ染め体験、校内家庭科室での豆腐作り体験なども実施している。また、地域の老人施設利用者の方との交流(音楽発表やプレゼント贈呈)も2回行っている。</p> <p>高等部では、勝山市教育会館にて製菓の販売のほか、勝山市すこやかフェスタに四つの作業班が出店参加した。また、外部講師による作業学習での講習(食品加工班:清水風月堂代表による調理指導)(農業班:福井県立大学教授によるふくこむぎの製粉)(農業班:奥越農林総合事務所講師によるカンタケ菌床プランター作り)を行っている。一般社団法人パラフットボール、日本代表を招いてのパラフットボール教室も実施した。</p> <p>今年度は、これまでの遠隔機器を利用した「間接交流」よりも、上記したように、より児童生徒が直接見聞きし、実感できる「直接交流」や体験活動が増えてきたと感じる。また、高等部においては、外部講師による講習のほか、アビリンピック福井大会に2名(うち1名は全国大会へ)参加したり、県技能検定(清掃、喫茶サービス部門に7名)にも今年度から参加したりするなどして、体験だけでなく技術の習得や技能の向上も目指してきている。そのことが、教職員・保護者の実感となり、教職員の成果指標、保護者の満足度指標ともに、判断基準A、Bの合計が90%を超えるという結果につながったと考える。本校が従前に取り組んできた「地域が教室」をスローガンとした教育活動が進んでいると考える。</p>	<p>コロナ禍中は活動の制限等により、地域を改めて調べたり探ったりすることで、地域の魅力や伝統・文化・歴史の再発見につながるがあった。コロナ禍が明けた現在においても、その流れを汲みつつ、地域の実態や魅力の再発見・再認識、地域の人的・物的資源の活用につなげたいと考える。</p> <p>課題として、校内で取り組んでいる地域に向けての様々な学習活動や交流活動が、各学部内で完結してしまっており、学校全体で共有できていないことが挙げられる。それらの取り組み内容を学校全体で共有することにより、地域の魅力や課題の再発見・再認識につなげたい。</p> <p>地域で育ち、持続可能な社会の創り手となることが期待される児童生徒のために、地域の実態や課題を把握し、教育課程の実施に必要な地域の人的・物的な体制を、組織的かつ計画的に確保し、学校の教育活動の質の向上を図っていききたい。</p> <p>また、地域に開かれた学校づくりを目指しつつ、これらの活動を積極的にホームページや通信などで保護者や地域に発信していきたい。</p>
<p>【渉外部】</p> <p>関係校務部と連携した学習会やレクリエーション行事を充実させたり、広報誌を通じて学校生活の様子を伝えたりする。</p>	<p>保護者支援</p>	<p>年度初めに計画していた活動を予定どおり全て実施することができた。家族支援に関する行事では、昨年度に引き続きPTA総会当日に、相談支援部と共催で東京家政大学の 新井豊吉特任教授による「きょうだい・家族支援」に関する講演会をリモートで行った。講演後のアンケートでは、参加者の95%以上が「満足」または「やや満足」との回答であった。進路に関する行事では、進路支援部との共催で7月末に「PTA企業・事業所見学会」ならびに「PTA学習会」を実施した。「PTA企業・事業所見学会」では、森目工房やわらぎと株式会社フクタカを訪問し、30名の保護者、生徒、教職員が見学をした。PTA学習会は、「就労支援セミナー」「障がい年金制度について」「参加者による交流会(座談会)」の3つの内容について、興味・関心のある時間帯に参加する形態で行い、18名の保護者、教職員が参加した。二つの行事ともに参加者からは好評で、「もっと多くの保護者の方に参加してもらえると良い」との感想が複数聞かれた。PTAレクリエーションは、学校祭当日にビンゴゲーム大会を行った。45家族、31名の教職員と多くの参加があり、例年以上に盛り上がりを見せた。同日に実施した昼食弁当販売や制服・体操服リユース販売も盛況であった。広報誌は、子どもたちの学習の様子や学校行事などをまとめ2回発行した。保護者からは「写真がふんだんに掲載されているので子ども達の学校での様子がよく分かる」、「毎回楽しみにしている」等の感想があった。</p> <p>これらの取組の結果、学校評価アンケートにおいて保護者については大半が取組を行うことができたという回答し、目標指数を上回る成果を上げた。教職員についても、昨年度を大きく上回る94%以上が具体的取組について「十分できた」または「おおむねできた」と回答した。</p> <p>課題としては、家族支援に関する講演会において、リモートで行ったことにより音声や映像の乱れが生じ聞き取りづらかった点が挙げられる。また、「PTA企業・事業所見学会」ならびに「PTA学習会」への参加者数が少ないことも懸案になっている。参加を呼び掛ける方法等について検討をする必要がある。</p>	<p>家族支援に関する講演では、対面で講演していただけの講師の方に依頼することも検討したい。PTA学習会ならびにPTA企業・事業所見学会については、保護者への案内文書に前年度参加者の感想を掲載したり、連絡エクステンジを活用したりするなどして、より多くの方に参加してもらえるように働きかけていきたい。</p>
<p>【生徒支援部】</p> <p>学校行事を学習発表や異年齢交流の機会と捉え、校外外と連携し一人一人の心と体の健康に留意しながら特性に合った参加を支援する。</p>	<p>生徒支援</p>	<p>今年度は、「学校生活において、一人一人が自主的・主体的な行動ができるように活動内容の充実を図る。」という重点目標を立て、「学校行事を学習発表や異年齢交流の機会と捉え、校外外と連携し一人一人の心と体の健康に留意しながら特性に合った参加を支援する。」という具体的取組を掲げて取り組んだ。学校評価アンケートでは、全ての教職員が「支援をすることができた」と回答した。</p> <p>特に、今年度の学校祭は、PTA販売や福祉事業所販売、PTAレクリエーションなどを新しく企画し、これまでの半日開催から1日開催に拡大した。さらに、卒業生や旧職員などの来校も受け入れ、当日は150名程度の来校者に来ていただき、各学部の発表を観ていただくことができた。学部ごとの発表では、全てのお子さんが参加できるよう、運動・音楽・作業販売など普段から取り組んでいる学習内容を織り交ぜた発表を各学部で企画している。参加が難しいお子さんには、作品を展示したり事前に撮影した映像を上映したりするなど一人一人の心と体に留意しながら特性に合った取組ができるよう、各学部が支援内容を工夫し、参加を支援することができた。これらのことで保護者の満足度指標が80%を超えたとと思われる。</p>	<p>新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが「5類感染症」に変更され、様々な制限をなくしている一方で、感染症が広がってしまわないよう、引き続き感染症対策を講じる必要がある。そのバランスを見極めながら行事を開催する必要があると思われる。</p> <p>また、幼児児童生徒の障害特性が多岐に渡っており、特に、本校に登校することが難しい生徒が増えている現状を踏まえた上で、今後も一人一人の心と体の特性に合った取り組みや参加を促す必要性があると思われる。引き続き、校外外との連携を行いながら、学校行事や全校集会を学習発表や異年齢交流の絶好の機会と捉え、学校生活において、一人一人の心と体の健康に留意しながら、自主的・主体的な行動ができるように活動内容の充実を図っていききたい。</p>
<p>【保健安全部】</p> <p>安全対策や緊急時の適切な対応を意識して、事故や災害を想起した点検・整備や各種訓練・研修に取り組む。</p>	<p>安全管理</p>	<p>今年度は、全教職員対象に緊急搬送訓練や救命救急法講習、医ケア児の緊急時対応(アンビュー)研修、安否確認メール訓練を行った。また、医ケア児が在籍する学部の教員対象に人工呼吸器の研修も実施した。それらの訓練・研修後にとったアンケートをもとに、アクションカードの設置場所を増設し、カードの置き場所を電話付近に統一するなど迅速に対応できるよう整備したり、安否確認のメール文面を分かりやすく改善したりした。安否確認は従来、電話で行っていたが、より迅速かつ正確に確認が取れるよう、今年度新たに連絡エクステンジを活用したメールでの安否確認の方法を取り入れた。安否確認の訓練は、保護者対象にも実施した。初めての取り組みだったので、操作方法が分からない方もいて回答を得るのに一部時間がかかったが、最終的に全保護者からの回答を得ることができた。次年度以降も定期的に実施し、定着を図っていききたい。</p> <p>避難訓練は、火事の想定と地震の想定で2回実施した。火事想定での訓練では、非常用滑り台を使用しての避難を体験したり、教職員が模擬人形を布担架を使って避難したりと、様々な状況を想定して取り組めた。地震想定での訓練では、発災時間の予告なしで休み時間帯に実施した。今回の訓練にあたっては、昨年度に紹介した映像教材での事前学習に取り組んでもらい、地震の際に起こりうる状況をイメージして参加してもらえよう工夫した。今年度は、訓練前に避難行動の学習をしたり、訓練後にも校内の防災設備の種類や位置を確認する学習に取り組む姿が昨年度より多く見られた。次年度も有意義な訓練や研修となるよう計画実施すると共に、情報発信を工夫し、緊急時や災害時に適切に対応できるようにしたい。</p>	<p>次年度も、いろいろな状況を想定し、計画的に研修や訓練を実施していく。次年度は、安否確認のメール訓練だけでなく、引渡し訓練も実施し、災害時の対応について保護者が体験できる機会を増やしていく。</p> <p>また、安全教育を避難訓練などの機会を生かし、計画的に実施してもらいやすいように、教材の紹介を工夫していききたい。教材は、市販のものや配布されているもの、配信されているものだけでなく、これまで授業に向けて教員が自作したスライド教材、プリント教材などの情報も集め、指導に活用・参考しやすいように整備する。</p> <p>安全点検の前には、災害を想定して点検してもらいやすいよう、点検の際の視点や注意点、ポイントを伝える。</p>

【担当部】 具体的取組	項目	成果と課題	改善策・向上策
<p>【相談支援部】</p> <p>居住地校交流、学校間交流、地域交流において、工夫や検討を重ねながら取り組む。</p>	<p>校内・地域支援</p>	<p>今年度、居住地校交流については、小学部では約8割にあたる13名の児童が、中学部では約3割にあたる3名の生徒がそれぞれの居住地にある学校で交流を行った。本校の児童生徒が相手校に出向いたり、相手校の児童生徒が本校に来校したりして対面する形で行う直接交流やリモートで相手校と繋がったり、作品交流をしたりする間接交流をうまく組み合わせ、一人ひとりの実態やニーズに合わせた交流の形を模索しながらすすめた。また学校間交流については、小学部高学年と中学部で実施し、県内特別支援学校や市内小中学校との交流を深めた。地域交流については、全ての学部で実施することができた。年間を通して地域販売会を開き、生活単元学習や作業学習で作った製品を地域の方に直接販売した。また、今年度から新たに、地域の食品会社の方や老人施設の高齢者の方との交流も実施した。児童生徒は交流を通して大きな喜びを感じ、地域の一員としての意識を高めることができた。</p> <p>学校評価アンケートにおいても、約9割の保護者が、本校の交流及び共同学習(居住地校交流・学校間交流・地域での活動等)について、児童生徒が参加する様子を知ることが、十分またはおおむねできたと回答している。一昨年度から今年度にかけて、毎年保護者の満足度は上がっており、保護者懇談や学部だよりなどを通して、交流及び共同学習の様子をできるだけ速やかにかつ丁寧に伝えてきたことの成果だといえる。保護者からは、「地域で買い物をしている際、居住地校交流で知り合った友達が我が子に声を掛けてくれたことが嬉しかった」と交流及び共同学習の成果を日々の生活のなかで実感されている声も聞かれた。今後も交流及び共同学習で繋がることのできたそれぞれの縁を大切にしながら、交流の内容を充実させていき、さらにその様子や成果を保護者や地域へも発信していくことが必要である。</p>	<p>今年度に引き続き、直接交流と間接交流をうまく組み合わせ、本校の児童生徒や相手校の児童生徒、地域の方の実態に合わせた交流及び共同学習の在り方を探っていく。またこれまでの交流及び共同学習で繋がった縁を大切にしていくと同時に、児童生徒の実態やニーズに合わせた新たな交流先の開拓を行っていく。さらに、PTA総会や保護者懇談、学部だよりや交流通信「あしあと」など、様々な方法で児童生徒の交流及び共同学習の様子や成果を保護者や地域へ積極的に発信していきたい。</p>
<p>【進路支援部】</p> <p>職場見学や現場実習の巡回同行等を通して企業や事業所の情報を収集し、卒業後の生活を意識した支援を行う。</p>	<p>進路支援</p>	<p>現場実習の評価全体から、準備をして待っているということが難しいこと、困ったときの対応ができない生徒が多いことが分かり、生徒全体に伝え、高等部教員と共有し、作業の時間等で意識してもらうようにした。また、保護者や本人にも評価を伝え、今後さらに伸ばしていくと良い点やもう少しがんばってほしい点など一人一人に応じて支援を行うことができた。</p> <p>新しくできた就労継続支援B型事業所は、奥越地区には今までにないイラストやパソコンを使った作業所ということで、巡回に担当以外にも同行してもらい内容や雰囲気を見てもらった。今後は、10月から始まる就労選択支援について、情報を収集して他の教員と情報共有を図っていきたい。</p>	<p>引き続き職場見学や現場実習を通して実習先と情報交換を行い、一人一人に応じた支援を行っていきたい。また、新しい制度の情報を収集し他の教員と情報共有を図っていきたい。</p> <p>高等部だけでなく、小・中学部の教員にも、現場実習の様子を見学していただいたり、PTA合同職場見学会や学習会への参加を促したりして、将来を見据えた進路支援を働きかけていきたい。</p>